2022 年 4期 10 課 地獄の火

【暗証聖句】
「すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。」テサロニケ一 5 章 21 節

【日・不滅のうじ】

イエス様は、マルコ 9 章 48 節で、「地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない」と言われています。この言葉は、イザヤ書 66 章 24 節からの引用で、そこには「外に出る人々は、わたしに背いた者らの死体を見る。蛆は絶えず、彼らを焼く火は消えることがない。すべての肉なる者にとって彼らは憎悪の的となる」と書かれてあります。このみ言葉は地獄に落ちた人は、永遠に苦しめられるかのような印象を与えます。確かに地獄は恐ろしいところであり、絶対に落ちてはならないところです。そのことを一つの例えを用いて教えられた文脈の中で、イエス様はこのように語られているわけですが、その例えも、実にリアルで恐ろしい表現を用いておられます。手足が壊死すれば、その部分を切断してでも全身を守るように、もし手足が罪を犯させるのならそれを切り捨て、もし目が罪を犯させるならそれをえぐり出してでも、地獄から救われるほうがましだと言われたのでした。何があっても地獄だけは落ちてはならない、神の国に救われなければならないと思わせるのに十分な表現であり、それをしっかり受け止めるなら、イエス様の言いたいことはきちんと伝わっていることになります。

しかし、地獄というところは本当に蛆が尽きることも、火が消えることもないところなのでしょうか。それぞれの行い（罪）に応じた報い（黙示録20：12）はあるにしても、愛の神様が、救われなかった人たちを一様に、永遠に苦しめ続けるということがあるのでしょうか。まず、地獄と訳されているギリシャ語ゲヘナは、ヒムノムという言葉から派生した言葉です。ヒムノムの谷と呼ばれる邪悪に峡谷がありました。アハズやマナセが王だったころ、異教の教えに従い、この谷に幼児をいけにえとしてささげました。それゆえヒムノムの谷は異教の習慣への堕落の場所であったのです。ヨシュア王が改革した際に、ヒムノムの谷は汚れた場所である宣言され、そのときからここはエルサレムの廃棄場となり、常に蛆がわき、大きな焼却炉のようにいつも煙がくすぶっていました。地獄の描写は、このような実際の光景が前提となって語られているのです。その上で、「蛆が尽きることも、火が消えることもない」とは、途中で蛆が尽きたり、火が消えたりして不完全な状態となることなく、完全に滅ぼし尽くされるということを教えているのです。

【月・地獄の火】

日曜日で学んだ地獄の消えない火という表現は、並行記事のマタイ18：8では「永遠の火」と描写されています。このような表現から、地獄は永遠に存在し、悪人は永遠に苦しむと考えている人が少なくありません。しかし、もしそうだとすると、悪も永遠に消滅しないことになります。また神様は「悪人が死ぬのを喜ばれない」（エゼ33：11）とあり、「彼らの行いに応じて」（黙示録 20：12）罰せられるともあるので、永遠に罰せられるとなれば、これらの聖句に矛盾します。どうやら問題は、「永遠」と訳されているギリシャ語「アイオーン」、またヘブライ語「オーラム」にあるようです。

この言葉が神様に用いられるときは、確かに神の永遠性を表しますが、人に用いられる場合は、人間の寿命に制約され生涯と訳されることもあります。そして、問題の火に形容される場合は、焼き尽くすまで消えないという意味で用いられるのです。マラキ書 3 章 19 節に「見よ、その日が来る。炉のように燃える日が。高慢な者、悪を行う者は、すべてわらのようになる。到来するその日は、と万軍の主は言われる。彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない」とあるように、「根も枝も残さない」ほど完全に焼き尽くされるという意味で用いられているのです。

このことが分かりやすいのがユダ 7 節です。そこに「ソドムやゴモラ、またその周辺の町は、この天使たちと同じく、みだらな行いにふけり、不自然な肉の欲の満足を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受け、見せしめにされています」と書かれてあります。ここに永遠の火の刑罰とありますが、ソドムもゴモラは今も火で刑罰を受け続けているでしょうか。もちろん、そうではありません。どちらも、もう存在していません。燃やし尽くされたからです。これと同様に、地獄の火も、完全に悪が燃やし尽くされたならば、神様が創造されたこの全宇宙から消滅するのです。

【火・煉獄にいる聖徒たち】

カトリック教会の独特の教理に「煉獄」があります。煉獄とは、地獄に落ちるほどではないが、天国に行くにはまだ準備が足りない死者が行くところとされ、そこで彼らは罪を清めるために苦しみを受けるとされています。また煉獄での苦しみは、その人を愛する者たちの祈りや免償（免罪符など）により軽減されるとされています。つまり、カトリック教会では、死者のための祈りと献金が半ば強要されていたわけです。死者への祈りは異教の教えに通じるものであり、免罪符は教会の腐敗の原因となり、やがて宗教改革につながっていきます（免償符に関しては現在は廃止されている）。

この煉獄の教えは明らかに間違いです。まず死者は無意識の状態で眠っています。二つ目に、唯一の仲保者はキリストであり、本人の努力や、ましてや家族のとりなしがその代わりになることはありません。三つ目に、死後のセカンドチャンスはなく、この地上でどのように生きたかで救いは決まります。

煉獄の教えにより、死後の誤った人間の状態を教えるだけでなく、悪魔が「神は人間を死んでまで苦しめる酷い方だ」と

主張する機会となり、神様のご品性を曲解させています。

【水・肉体から離脱した魂のいる天国】

愛する人と死別するとき、宗教の有無に関係なく、「天国にいったんだね」などと、多くの人が口にします。それは悲しみのうちにある人にとって慰めとなるからでしょう。ところで、死んだらどうなると思いますか？というアンケートがありました。興味深いことに、無になる・意識はなくなると答えた人が全体の約 65%、別の世界に行くと答えた人が約 35%でした。つまり、多くの人は死んだらそれで終わりと考えており、したがって「天国にいったんだね」というような言葉を使うとすれば、慰め以上の意味はないということがわかります。しかし、35％、３人に1人は、天国のような別の世界があって、そこに行くと答えています。もし、クリスチャンに同じ質問をしたらどうでしょうか。SDA 以外の多くのクリスチャンは、すぐに天国に行くと答えることでしょう。確かに、死んだら眠るというような漠然とした状態を言われるより、死んだら天国と言われたほうが、よりうれしく、力強い希望となるかもしれません。

しかし、だからといって勝手に聖書の教えを変えて良いはずはありません。そもそも、死んですぐに天国に入れるのだとしたら、復活はどうなってしまうのでしょうか。イエス様が再臨されるとき、天国からもう一度墓の中に入るのでしょうか。また再臨前の審判はどうなってしまうのでしょうか。

確かに、すでに天国に入っている人たちはいます。生きたまま天に上げられたエノク、エリヤ、一度死んだあと復活して天国に入ったモーセとイエス様が復活したときに一緒に復活した聖徒たちです。聖書にはこれ以外の人のことは一切書かれてありません。アブラハムもダビデもダニエルも、またペテロやヨハネ、パウロたちも、みな眠りについて復活の朝をまっているのです。ダビデについて語っている使徒言行録2章29節から35節にかけての聖句は、復活の朝まで眠っている状態をよく表しています。

使徒言行録 2 章 29 節「兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。」

使徒言行録 2 章 34、35 節「ダビデは天に昇りませんでしたが、彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。」』

【木・聖書の視点】

「御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません」ヨハネ一 5 章 12 節

聖書は永遠の命が与えられる者と与えられない者とがいることをはっきりと教えています。永遠の命が与えられている者は、文字通り永遠に生きることになりますが、永遠の命が与えられていない者はどのような形であれ生き続けることはできず、最終的に滅んでいくことになります。霊魂不滅を信じている人は多いですが、そうではないということです。聖書はイエス様と結ばれている者だけが不滅であり、そうではない人たちは不滅ではない、滅亡することになると教えているわけです。

では御子なるイエス様と結ばれているとはどういうことでしょうか。それはイエス様を信じ、み言葉に従って生きている人、言葉を換えるなら、いつもイエス様と歩んでいる人のことです。このような人には永遠の命が約束されています。

また、このとき重要なことは、神様だけが永遠の命を与えることができるということです。そして、この永遠の命は御子なるイエス様の中にあるということです。

ヨハネの手紙一 5 章 11 節
「その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。」

だから、イエス様と結ばれていないと永遠の命をいただくことができないのです。一人の人アダムによって罪が入り、すべての人は永遠の命を失いました。そこで神様は一人の人イエス様によって永遠の命をすべての人に与えようとされたのです。誰でも、イエス様のもとに来るならば、この永遠の命が与えられます。難しいことは何一つありません。しかし、多くの人は永遠の命をもらうためにイエス様のもとに来ようともしません。これはなぜでしょうか。それはイエス様を信じていないからです。イエス様を信じなければ、イエス様と結びつくことはできません。信仰によって人は救われると言いますが、それは私たちの信仰が、イエス様と私たちを結び付けるからなのです。